

名画盗難事件を描いた映画 「ゴヤの名画と優しい泥棒」



2022年に公開された、ナショナル・ギャラリーからゴヤの名画「ウェリントン公爵の肖像」が盗まれた事件を描いた映画（英語のタイトルは「The Duke」）。ケンプトン役をジム・ブ

ロードベント、長年苦悩してきた妻をヘレン・ミレンが演じている。ケンプトンが死去した年（1976年）に生まれた孫、クリストファーが製作総指揮に加わっている。

前半はコメディ調でストーリーが進むが、クリストファーが「この映画は労働者階級の闘争の物語」と語るように、後半の裁判シーンは息をのむ展開に。ケンプトンが実際に公判で行った演説が、ほぼそのまま再現されている。

過去の関連特集記事はコチラ



ウェリントン公爵の
栄誉の館
アプスリーハウス



開館から200周年
ナショナル・
ギャラリー誕生

2012年、この名画盗難事件に関する警察の極秘ファイルが公表された。驚くべきことに、そこには肖

驚愕の大どんでん返し

犯行の動機とその熱意は裁判員や国民の心を大きく揺さぶり、罪状は非常に軽いものとなった。絵画自体は返却されたことから窃盗罪には問われず、額縁を盗んだ罪だけが成立。3カ月ほど刑務所で過ごしただけで、すぐに釈放されている。75歳以上の年金生活者のテレビ・ライセンスが無料となったのは、事件から40年後の2000年のことである。

それから6週間後、ケンプトンはロンドン警察に自ら出頭。英国中で長く注目されてきた事件だ、裁判の様子は大きく報道されるに違いない。法廷でテレビ・ライセンス料の無料化について国民に訴えよう――。そう考えての自首であった。

やがてバーミンガム・ニューストリート駅のロッカーの領収書を受け取った新聞社の通報により、同所から額縁のない肖像画が発見される。奪還された絵画はすぐにナショナル・ギャラリーに展示されたが、やはり有料公開されることはなかった。



現在「ウェリントン公爵の肖像」が展示されている、ナショナル・ギャラリーのRoom45。

れる際に動転し、盗難事件の真犯人だと自供したのである。ジョンによると、当時トッテナム・コート・ロードに住んでいた彼は、話題の絵を見るためにナショナル・ギャラリーへ足を運んだものの、盗んだのは衝動的だったという。我に返ったジョンは絵の処遇に困り、父親に相談。燃やして証拠隠滅を図ろうとしていた息子を止めたケンプトンは、テレビ・ライセンス無料化運動の道具として絵を使うことを提案し、最終的にはナショナル・ギャラリーに返却すると話していたと明かした。犯行が暴かれた場合は、自分がその罪をかぶるから、「絶対に名乗り出るな」と言われたという。

ジョンの自首を立証する証拠はない。また、この事件を再検討することは、ケンプトンに見事出し抜かれたことを意味し、法曹界にとっては大恥の出来事だ。結局、真実は表に出ることなく闇に葬られたのだった。この事件以降、英国の美術館や博物館のセキュリティは大きく見直された。多数の監視カメラの設置や警察犬を連れたの夜間パトロールなど、さまざまな改善策が導入され、今日に至っている。

像画を盗んだ真犯人はケンプトンではなく、20歳だった息子ジョンであることが記されていた。当時から、ケンプトンが犯人であることに疑問を抱く者はいた。長身でがっしりした体格、体重は110キロ。そんな男が機敏に動き、トイレの小さな窓を出入りできるのだろうか？しかし、彼は自らの犯行を認めており、新聞社へ送った手紙の筆跡も合致していた。

事件が再浮上したのは1969年、ケンプトンが出所してから4年後のこと。リースで軽犯罪で逮捕された息子のジョンが、指紋を採取さ